

## 令和元年度 第1回 平塚市博物館協議会会議録

開催日時 令和元年5月24日(金) 10時～12時

開催場所 平塚市博物館 特別研究室

会議出席者(敬称略)

会長 椿田有希子

副会長 平井 晃

委員 安室 知、植田育男、鈴木美喜、横関秀美

事務局 高橋社会教育部長、澤村館長、  
杉山館長代理(管理担当長)、栗山館長代理(学芸担当長)

傍聴者 0名

会議の概要

- 1 開 会 新任委員に博物館協議会委員委嘱状交付  
社会教育部長挨拶  
異動・昇格・新採用職員紹介
- 2 議 事
  - (1) 報告事項等について
    - ・ 春期特別展「民具の物語」について
    - ・ 「こどもフェスタ2019」について
  - (2) 今後の事業計画等について
  - (3) その他
    - ・ 事務連絡等
- 3 閉 会

議事および質疑

議題(1) 報告事項等について

---

春期特別展「民具の物語」について事務局栗山学芸担当長が説明資料により説明。

委 員 民具の物語を拝見した。平塚市のかつてそこに暮らしていた人の生活や息遣いなどが伝わってくるようなすごくいい展示だった。

図録を拝見すると色々とそれを使っていた人々の生の情報が盛り込まれているが、これはすべてにおいて学芸員の方々が何かしら情報収集、取材をさせていただいて盛り込むといった形で制作したのか。

事務局 民俗資料の場合には、ご寄贈いただくといった話の時に、まずはモノにまつわる話というのを徹底的に話をして聞き出している。それに加えて、そのモノだけでなくその周辺の住民の方の色々な話を総合して聞くということを重視している。

今ちょうど同じ時間に別の場所でやっているが「聞き書きの会」というワーキンググループもあり、とにかく昔の話を聞くということが民俗学の大きな柱なので、こうした情報というの

はかなり持って、それを展示の中で反映させていた。

委員 小学校2年3年4年ぐらいに昔の暮らしと道具という单元があった。色々な博物館・資料館に子どもたちが学校団体で見えて、道具を見たり、場合によっては使ってみたりというような場面を拝見したことがあるが、子どもたちが自分のお父さんお母さん、あるいはそれ以上のおじいさんおばあさんも使ったことのないような民具を前に説明を聞いているので、全然繋がってこない。そういった意味ではこの情報は現存する生の情報が盛り込まれているというのがあるので、小学校の事業とうまくリンクしたらいい形になるのではないかと。大変ですけどね。学校のほうからそういう働きかけなどでそういうつながりを持てたらいいのではと感じた。

委員 私も同じことを考えていたが、ちょうど3年生が昔の道具というところで勉強するのだが、博物館の方には見学で来させていただいて話を聞くということをする。私も来たことがあるが、やっぱり初めて来てその場で話を聞けけれどピンと来ないところがあったので、この冊子がとてもいいなと思った。写真もあったり、実際に使っている様子などところどころ入っているので、子どもたちがイメージしやすかったり、身近に思うと言ったら変だが、今の自分の暮らしと比べたりとか、思いをさせたりするのがとてもいいなと感じたので、こういったものがあるとありがたいなと感じた。

委員 どこの小学校とは言えないが、小学校の空き教室を使って昔の民具、特に農具関係のものがかなり色々収蔵されていて、また展示されているのだが、この前ちょっと覗いたらこのところはいつ整理されたのだろうか、置きっぱなしといえるような状況じゃないのかというようなことでその教頭さんか誰かに話をしたことがある。

そういういくつかの小学校には地域の色々な道具が置かれているのではないかと思うのでその辺の活用をやって貰えたらいいのではないかと感じる。

事務局 今小学校での利用ということで二人の委員さんにアドバイスをいただいた。実際に博物館に3年生の段階で、団体で勉強に来られるというのは非常に多い。民具の場合、見てその名称と何に使うかを覚えるのではなくて、どう使ったのか、どういう使い方をするのかということが大事で、あるいは今だったらこの作業はどうやっているのか、そういうところまで踏み込んでいかないと中々お子さんたちの興味が引き出せないなという風を感じる。

小学校の生徒さんが来られた場合に展示解説ボランティアの皆さんに対応・説明していただいているが、ボランティアの方にはそういったものの使い方とかそういったことまで知っていただいで、その解説をしていただいている。小学校で授業で使いたいということで貸し出しをするということもやっている。一点物の資料だと貸し出せない場合もあるが、いくつか複数あって貸し出すということが出来るものもあるので、ぜひ学校の先生方にも貸し出しができるということを知っていただきたくこちらでもPRしているので、ご利用いただければと考えている。もう一つ、平井副会長からあったように、学校の空き教室も、かつていくつかオファーがあって展示室というものをつくったり、そのお手伝いなどもさせていただいたのだが、どうしてもその熱心な先生が別の学校に行ってしまうと放置されてしまうという問題が1つ。もう1つは学校の空き教室の地域の活用というのが色々出てきて、学校に熱心な先生がいなくなり、埃

をかぶってしまった郷土資料室というのが活用されてないということになり、じゃあこういったものは引き上げてくださいというケースもあって、中々継続していくというのは難しいという風に考えているところである。今市内であるのは1校か2校ぐらいでしょうか。

委員 3校ありましたね。最近あまり行かないからわからないですが。

事務局 そうした全校に配置するというのは資料の数的にもかなり難しいところはあるかもしれないが、機会があったら積極的にそういったところも協力していきたいと思っている。

事務局 図録については各学校に、1部ずつだが配布させていただいている。学校によってどこに配置なさっているか把握していないが、こういったものが学校に行っているはずということを皆さんで共有していただきたい。

また、授業される先生方と、それから説明する私共とがそれぞれに得意とするところが違います。我々が子どもたちにどのような言葉を話せば伝わるかは当然先生方のほうがご存じだし、一方で資料に関する知識は博物館の方が持っている。その双方でそれぞれに知識を持ち寄って協力することが効果を上げる方法ではないかと思うので、ぜひ図録のことも学校に宣伝していただいて、活用していただければ、私たちにとっても良い情報提供ができるのではないかと思います。

委員 今回、民具の使い方はもちろん、使っていた人たちのことが詳しく載っていてサイドストーリーのようにさりげなく触れているということで、民俗の展示を私はよく存じないが、このようにフォーカスするというのは特色があることなのだろうか。

委員 個人のライフストーリーが展示の中に表れるというのはむしろ珍しいかもしれない。モノに焦点を当てられて。だから今回の展示は私なんか非常に面白かったのはやはりモノを持ってた人の写真がそのまま出て、語りが出て、モノが出てるといふ。フィールドワークの一環がそのまま展示室に出ているというような。なので、民俗同業者としては非常に興味深いのだが、それがどこまで学生や来館者の方に伝わるのかということではご苦労されたのかなと感じた。図録が60部しか売れないのはちょっとショックですね。民俗やってる人間としては。

委員 人の生きざまというか、人の生きている空気がリアルに伝わってくる感じがして私は興味深く拝見した。あと入館者数が少ないとか図録が売れないとかあるかもしれないけど、展示としてとても素晴らしかったなと感じた。昔ちょっと平塚に住んでた人間としてこの地域にこういう人たちがこういう生活をしていたという生きざまがわかってとても面白かった。

委員 視点を変えた意見になるかもしれないが、この立派な分厚い図録を作られて学芸員さんの方は大変だったと思うのだが、特別展も結構春夏秋と回数あるのでちょっと心配になるのが、その特別展は多分担当されてる学芸員って一人で、これをある程度マネジメントしてると思うのだが、そういった労務管理的と言ったら変だけど、学芸員さんにこれだけやるにあたって負担が集中して、ちょっとやっぱり疲れ切ってるようなことがあるような問題が心配になってくるのですが、展示を見ても相当の量の展示をされているし、その辺の問題が今どういう風に認識されているのか。もしそういった問題があるのであれば、ワーキンググループが結構いろいろあるから、もっとこう市民が積極参加して運営していく姿がここの博物館のポイントでもある

のでその辺をもっと活用して、極力学芸員さんの負担が集中しないように済むような配慮と、継続してどんどんよくなるようなことが、いま必要なような気がするのですが、その辺なんか、方向違っているかもしれないが、何かあれば。

事務局 今委員さんがおっしゃっていた通り、特別展事業が年3回ある中で、担当者は各分野の学芸員が一人ずつしかいないので、学芸員担当は1人ということではございますが、各分野、ワーキンググループという形で参加されている皆さんもいらっしゃる。この「民具の物語」、民俗分野の方では、民俗探訪会というワーキンググループを中心に、実際に展示作業を連日手伝っていただいた。図録の執筆とか、展示の構成全体を考えるのは、担当する学芸員にしかできないし、担当以外のほかの分野の学芸員がやろうとしてもよくわかりませんので、その辺はどうしようもできないが、現実にその準備の段階ではワーキンググループの皆さんの協力というのは非常に大きい、現時点で大きな力になっているところである。それ以上にもっと内容的に高めたいという風になってくるともう学芸員のやる気の問題になるので、時間外が多くなるということもあるけれど、その辺はもう自己管理でやっていくしかないということ考えている。働き方改革という動きで、あまり残業が多くならないようにというご時世でもある。やはり展示の方では力仕事、展示会場の設営とか、その辺に関しては学芸担当、ほかの学芸担当も含めて日を合わせて全員でやるとか、そういう対応もしている、という状況です。

委員 学芸員さんによっては自分で抱え込んでしまってもう全部自分でやるというニュアンスで頑張られる方もいらっしゃると思うので、くれぐれもその辺負担が集中しないように。やはりワーキンググループもいるので、きちっとその辺を一緒にやっていけるような形で、なるべく過度の負担にならないようにやっていかないと、学芸員さんにおんぶにだっこでは続かないと思う。いつか何か起こるんじゃないかと心配してるので、その辺のところをワーキンググループを活かして、一人でやるんじゃないんだ、みんなでやっていくんだよという内容が熟成されてそれが文化になってどんどん大きくなっていくといいかなという風に思う。そういうのがあったら、頭の隅に置いていていただけたらと感じる。

事務局 学芸員の労務管理というお話が出ている。学芸員は市の職員という立場で仕事をしているけれど、何を達成の喜びとするか、何を仕事の喜びとするかということと、待遇面とを両方を考えた時に、中々一般化するのが難しい職種であるという風に意識している。ただ労働時間だけを管理すればいいかという学芸員という職種は決してそうじゃないと思っている。それは個々の学芸員が何をしたいのかということで話し合っ、仕事の仕方というのを個別に考えていくべきかと考えている。もちろん、自ら望んで働きすぎてしまうというケースも懸念しなければならないから、その点は気を付けていこうという風に考えている。

また、学芸員にとっては接している市民の方から声をかけていただくというのは何よりの喜びなので、実際に色々な場面で力を貸していただいている。学芸員に今言っていたようなことを言っただけだと本当に力になるし、じゃあ考えてみようという気になると思うので、もちろん職場としてもやっていくけれど学芸員に接してくださっている市民の方々からぜひそんな力付けの言葉を言っただければと思います。どうもありがとうございます。

「こどもフェスタ2019」について事務局栗山学芸担当長が説明資料により説明。

委員 今年初めて出されたプログラムとして、鳥のステンシルカードで遊ぼうというのがあるが、具体的にどのようなことをするのか。

事務局 カードに鳥の塗り絵が書いてあるので、会場内には実物の剥製を置いてあるので、鳥のカードに実際の剥製を見ながら塗り絵をする、終わるとそれをもってかえってお土産にすることができるという形であった。こちらの企画は講堂の方でやったが、来て、ちょっと座ってすぐ参加でき、小さいお子さんでも簡単に参加できるので、小さいお子さん連れで参加することができる企画であった。

事務局 鳥って外で見るとじっとしてくれないので、それが動かない実物の標本を見て書くことができるので目の前において塗り絵をするって、実際にやってみるとすごい豪華でこれは面白いなど好評をいただいたようです。

委員 アンケートの自由記述欄に、二日間開催してほしいという風に書いてあるがこちらについてはどのように考えているのか。現実にはなかなか難しいのか。

事務局 人気なので、2日あれば2日とも大盛況になると思うが、これほどイベントがあると学芸員だけでは回りません。ほとんどすべてのイベントがワーキンググループで運営しているイベントで、各分野もイベントが2～3個ある状況なので、その場に学芸員がいないイベントだらけという状態なので、それで2日間というのは人員的にも厳しいところがある。参加者の方から、これだけイベントがあるとみんな参加したいという方が1日では回り切れないということで2日欲しいという意見を実際いただいているが、開催する側としては1日で限界です。

委員 ご事情はよく分かりました。ありがとうございます。

事務局 補足すると、全部回れないというのは、まだもしかしたら並んでいる時間が長くなってしまいうイベントがあるかもしれないので、並ぶ時間を減らすような形なるべく多くのイベントに参加していただけるように工夫を重ねていきたいと思っている。

委員 とても楽しそうにしている子どもたちが目に浮かぶというか、子どもたちの好きなものが並んでいるのがいいなあと思った。

二日間開催が厳しいのであれば、春バージョン、秋バージョンみたいに開催したらいいのではないかと感じた。

委員 懐かしの民具体験というのはどのようなことを行ったのか

事務局 今年は藁縄を編んだり、棧俵を作ったりした。

## 議題(2) 今後の事業計画等について

夏期の展示・行事の計画について事務局栗山学芸担当長が説明資料により説明。

委員 「平塚学入門」について、これを1つ見れば平塚のことが大掴みで掴めるということで大変興味深い。1つ心配なのは、これ非常に盛りだくさんなので特別展示室に収まるのだろうか。

事務局 展示資料については絞らざるを得ないかなと思われる。できるだけ博物館なので実物資料を1

点でも多く設置したいのだが、例年うちの特別展は展示資料数が非常に多すぎるような印象もあるので、その辺見やすさも考えながら写真で代替する部分もあるかもしれないけれど、また、配置等はこれから考えながらやっていきたい。今の段階では、展示資料というのは各学芸員が挙げてきたものがそのままなので、ここから絞っていく必要がある。

事務局 今準備を急ピッチで進めているところなので少し固まっていない部分もある。現場の考えも聞いていかないとわからないが、常設展示のなかの展示もこの中に含まれていることから、常設展示室にそのまま展示しておいて会場の方にはここにあるよというご案内だけするというやり方もあるのかなと考えています。

委員 中身というか、これは非常に魅力的なのだけれどどうやって宣伝して、来てもらえるかがポイントになるような気がする。「平塚学入門」という言葉で人が来るかなという気もちょっとするので、キャッチフレーズというか、先生方が興味惹かれるような、キャッチコピーがあればいいけど。これだけ大々的にやるなら、平塚学入門って人が来そうかなというのが気になるところ。ひとひねり欲しいような気がする。

委員 でも結構こういうタイトルで本が出ていたりするので、地域名+学入門みたいなのはよく出ているのでこれ反対の意味で思ったのが、出版社が乗ってこないかなとか思ったりするんですけど、図録でやるとなると足かせがありますね。112ページに収めていらっしやるとなると。図録が厚くなると中々売れなくなるんですけど、これだけ労力をかけてこれだけのものを集められれば、地元の出版社、県の出版社辺りに載るような、まあ今後だけれど、そういうことも考えられる。市民だけじゃなく、県またはそれを超えるレベルで、出版されるといえるものに、Amazon なんかにも引っかけってきますので、そういう意味での広報には役立つのかなという気がした。これだけ労力をかけられるのにもったいないなと思ったので。

委員 図録だとどうしても写真の解説が中心になりますけどコラムみたいな形で書くような形があれば面白いですよ。

委員 去年こちらで例の臨時閉館の時期に、市役所の一部でポスター展示をしていたので、これのサテライト展示みたいなポスター展示をこちらでして、こちらの方に誘導するみたいな連携させて観覧者を誘導するという風に、向こうではさわりだけやって本当の展示はこっちでしっかりと見ていただけますよ、みたいなことってできないんですか。ちょうどこれ夏休みの時期だから、小学校中学校世代を誘導できる可能性はあるかなという気がするのだが、そういうのはできないのか。

事務局 多少の問題が1つあるかなと、かなり年間できっちり予定を組まれてしまう。あとはこちらの内容が定まるのが果たして間に合うのかということもいえる。こちらで展示作業をするよりも締切がかなり早くなって来るから、そういった広報のタイミングに間にあうかどうかという不安がかなりある。

事務局 昨年度の多目的スペースを使った展示というのが、こちらと直接連携していたわけではなかったのですが、今アドバイスをもらって、そういえばこちらが特別展やっているときにそのダイジェストとして同じ期間にやるというのも新しい試みだと気づかされました。向こうのスペースが

開いているかどうかさっそく図ってみたいと思う。ありがとうございます。

事務局 私から皆さんにお願いなのですが、関連行事の「異分野鼎談」というところ、コンセプトが不明なタイトルなので、何かいいご提案はないか。何か日曜日の朝の政治番組みたいになっているので。

委員 中々難しそうですね。異分野、分野という言葉が果たしてどれだけ一般にとってポピュラーなのか。我々は総合博物館の中で日常過ごしていると、分野、という言葉は使い慣れているが、果たしてこの分野という言葉が一般の方に分かりにくいのではないかという風に感じるがどうだろうか。

委員 分からないと思いますね。総合博物館といわれてもピンとこない、博物館は博物館だという方々も多い。これは、それぞれの専門家を呼んで、パネルディスカッションのような形になるのか。

事務局 そうですね。

委員 それぞれの視点で平塚のことを話すのか。

事務局 そうですね、それで、ただ勝手に話しているのでは全然別の話の寄せ集めになるので、そこを1つ、2つテーマを決めてやる。例えば第1回だと歴史の担当の学芸員、民俗の担当の学芸員、生物の担当の学芸員で、例えば「米」という植物をテーマにすると歴史の観点からいうと米の生産力が政治力とつながっているという視点になるだろうし、民俗でいえば、米の品種をどのように栽培していったかという視点になるだろうし、生物学の話でいえば、ジャポニカ米、インディカ米という品種の話になってくるかもしれない。そういった話の中でミックスして違って違う視点の話題にしていく、という風に考えている。

委員 そういうところからきっかけにするのであれば、逆に共通する内容がこういうものがあるんだよという話題をもっていけばいいのではないか。例えば天文だったら天文と過去の公文書がつながったり、天文と地学で隕石の話からその中の物質から、こういう由来があって地球の歴史がこういう風になっているという風につながるし、たとえばその隕石の中に生物のある遺産が発掘されるっていうなら生物と天文がつながったりという事で、こういう風に皆さんが異文化異文化と言っているけれど実際につながっているところがいっぱいあるんだよという風に共通性のある所をとらえて、こっちの分野とこっちの分野ではこういう風につながっているんだよっていう「へえそんなことあんの」という驚きが結構発見できると思う。

そういうのをテーマにもってきて、「へえ」というところをいっぱい出す。するとタイトルに対して中身もおかしくないように思う。なんか突っ込んでいくと結構そういうのがでてくるものだから、だったら最初からぼんぼん飛んでもいいからこういうつながりがいっぱいあるんだよって驚きをみんなに見せるというのも一つの手かもしれない。

事務局 分かりやすくするには、テーマ、異分野って熟語じゃなくてももう少し具体的なテーマを謳った方がということですね。

委員 結構そういうところにつながっているんだよというので気づきがいっぱい出てくると思う。そういうのをみなさんと語ってみましょうという。そういった意味ではなんでも話題になりそう

だけど。

委員 メインタイトルを置き、例えば「平塚学シンポジウム」でもいいかもしれないけど、タイトルにその話す内容やテーマをいれていくというご意見もあるのかと思ったので。あれですね司会者とかコメンテーターとしての力量を相当問われそうではありますね。

事務局 さっき米の所も生物の品種とかの話ありましたけど、害虫とか結構そういう視点も面白そうと感じた。

委員 メダカですね。メダカの全般は肥料役として米の耕作に関係しているという話なので。平塚は昔 1978 年当時、浜口さんらが調べられて、グッピーが来たり、外来種が入ってきたりしたと思いますけど。

事務局 水田の生き物といったところですか。

委員 そういった種での話もありかなと思ったので、あとセミだったらセミで色々今変わってきているので、セミの抜け殻が調べられている側面から温暖化の話ができますね。あのクマゼミはそれと人の暮らしがどのように結びついているのかもリンクさせていいと思った。あと、交通網の話とかもいいかもしれないし、ちょっとその辺のつなげ方はよくわからないですけど。

委員 関連性を持たせることはいろいろと出来ると思う。

事務局 言はいろいろありそうですね。

委員 おもしろいですね。

委員 分野なんとなかっていうのが今よくわからないっていうか、子どもたちに授業する人間が言うことじゃないですけど何を意味する言葉なのか。どちらかということ人文系の人たちの専門用語なのかなっていう、もうちょっと小学生、まあこのイベント自体の主対象は変わるのかもしれないが、もともとのこの一番大きな展示の主対象っていうのは小学生・中学生なので、その人たちにもある程度伝わるようなクロスオーバートークとか、いろんな分野から平塚を語りつくす場なのか、ある程度はつなぎ合わせて中学生でもわかるような。あるいはみんなで考えるとその場の参加者にも意見を聞いて、皆さんの近所にこんなものありますかとか。

事務局 ありがとうございます。いろいろと意見をいただいた。

委員 話が「平塚学入門」の方に集中していますが、それ以外の所で何かありますか。

委員 今年は、夏休みによくやられていた「イブニングミュージアム」、こういう企画はやらないのか。まあ一個「平塚学」の方をやられていて大変なこととは思うので。

事務局 資料 5 に載せ忘れました。予定をしております。

8月6日の火曜日から、8月11日の日曜日まで、この一週間をイブニングミュージアムウィークとして、午後7時まで開館時間を延長して、その間に学芸員が講演します。

委員 展示活動以外の事業の事でもいいですか。

事務局 はい。

委員 一週間ぐらい前に必要になって『自然と文化』のバックナンバーを探していたのだが、今はもうこちらのホームページから入ればよかったのだけれど面倒くさくてCiNiiという国立情報学研究所が出している歴史学の方はよくご存じの、人文系でもこの頃学生はそこから入って論文

検索をするんですよね。それに載ってこないんですよね、残念ながら。『自然と文化』、それから博物館の図録もそうですけど、載ってこない。恐らくこれは伝統のある学術誌として『自然と文化』の場合には位置づけられるし、学芸員が書いた論文っていうのは市民だけの物じゃなくて、例えば道祖神の研究がやりたいという方に、全国で論文を引く時に CiNii から入ったときに『自然と文化』が引っかかってこないというのはすごくもったいないことだと思う。これは金銭的な問題はそれほどないと思うので、そういうデジタル情報として発信できるような状況をぜひつくって頂きたい。知的な財産として全部皆が共有できるような状況を作って頂くと、もっと平塚市博物館の活動が理解されるのではないかという気がした。

可能ならゆくゆくは、図録だとか年報だとかをすべてデジタル公開していく。今大学で出版するのは全部そうなんですよね。有料で頒布するものでも一年ぐらい猶予を置いてデジタル公開していつている。それで、『自然と文化』が載ってこなかったのだからこのホームページを拝見したら、博物館アーカイブという中の一ページには例えば歴史だとか天文の方が、個人的になのか PDF を載せてらっしゃったんですけど、やはり CiNii には引っかかってこなかったのだから、できれば、1年置いて、出版年から1年置いたらそういうデジタル化して公開していくような体制にしていく方向で動くのが、今は図録だとか博物館の年報なんかを1つ1つ丹念に見ていくという事をしないで、すぐそういう検索ソフトで見られるようになったので、ぜひそれをやって頂く方がいいのかなと。定価を付けたものをデジタル公開していくというのはきっといろいろなところから、市役所の方から抵抗があるかもしれないが、数年の流れとしてはそれをやって頂く方がいいんじゃないかと思う。どこかでそういった事業を始めて頂けるとありがたいなという風に思う。

委員 今の話は何年か前にも出なかったか。

委員 前にも出たんですね。

委員 同じような事例があったような気がする。だからやっぱりなんか、そのこのところを問題とされている方がおられるということなのではないか。

事務局 博物館の今後の課題として、調査・研究機関であるという位置づけをきちんと説明していきたい。そういうことが一般の方々にも理解していただけるようにしていく必要があるんじゃないかと。これから重点的に取り組んでいかなければならないことの一つだと考えている。その中で論文検索に引っかかってこないというのはかなり、足元を取られるようなお話なので、まずは掲載の要件その他に『自然と文化』がかなう形であるかというところから、調べていきたいという風に考えている。

それから、ゆくゆくは刊行物がデジタルの形で、ネットで公開されているという形を目指してほしいということに関しては、世間の要望、市民の皆さんの要望というのがあればという事になっていくのだけれど、流れとしてはそういう流れだろうなというのは私も認識している。

一方で過去の刊行物、ホームページのアーカイブについての話としては、過去の刊行物なので借用資料その他で、ネット上での公開という事に改めて許可を得ていかなければならないものがあるから、そちらについてはどなたが権利を持っているのかとか、かなりそういった

調査に手間がかかってしまうので掲載が困難になっているものが多くあるという状況のようである。むしろ、今後のものの方が取り組みやすいかなという風に感じているところである。

委員 そうするのはなんか、どこかの許可を得なきゃいけないのか。ルールというか。

事務局 当然借りたものについては所有者が他にいればその方の許可がなくては掲載できない。

委員 『自然と文化』の文みたいなものも一定の期間、公開するにあたって、資料はやってはいけないとか、そういうルールみたいなのはあるのか。

事務局 申し上げたように、図録などで資料を公開するにあたっては、所有者の権利というものも尊重していく必要がある。市の方で何かルールを設けているという事はない。論文に関しては、本の格というかそういうものを掲載する側が制約をかけている場合があるので、その基準にあっているかどうかという事を我々がまず調べてクリアすることを目指すのか、その段階だと、ちょっと市の枠組みでは難しいということもあるかもしれないし、それをまず調べてから、ということになる。

委員 人文系の場合だと CiNii も使うんですけど国会図書館の NDL-OPAC で論文が引かかるかをよく見る。平塚の『自然と文化』がどのようになっていたかわからないのが、その論文検索で『自然と文化』って本で出てきてしまうのか、個々の論文が出てきてしまうか、研究者のアンテナに引かかるか引かからないかが結構大きい気がする。多分国会図書館の場合は自分の所の独自の基準で論文 1 個 1 個を取っておくかいかを決めるので、こちらでどうにかできる問題じゃないと思う。検索がどうなっているかは NDL-OPAC を見てみないとわからないが。

事務局 何年か前に、国会図書館に刊行物を送付しているかどうかを調べたことがあって、かなり漏れがあった。その時には送るようにはしたが、その後どうなったかのチェックを怠っているので、もう一度チェックしたいと思う。

委員 少なくとも外部の検索ソフトに載せるかどうかは、少しいろいろなハードルだったり、過去をさかのぼったりすると文化庁の裁定を受けなくてはならない部分もあったりするのでしょうかけど独自の、博物館のホームページから見られるような情報公開ですよね。それが、今後、まあすぐにでもできるのではないかと、個人情報なんかに気を付ければ。できる所で進めて頂ければと思う。

### 議題(3)その他

---

委員から過去の議事録の記載ミス、掲載の遅れについてご指摘があり、事務局は修正をお約束した。次回の協議会は 11 月 15 日に開催することとした。